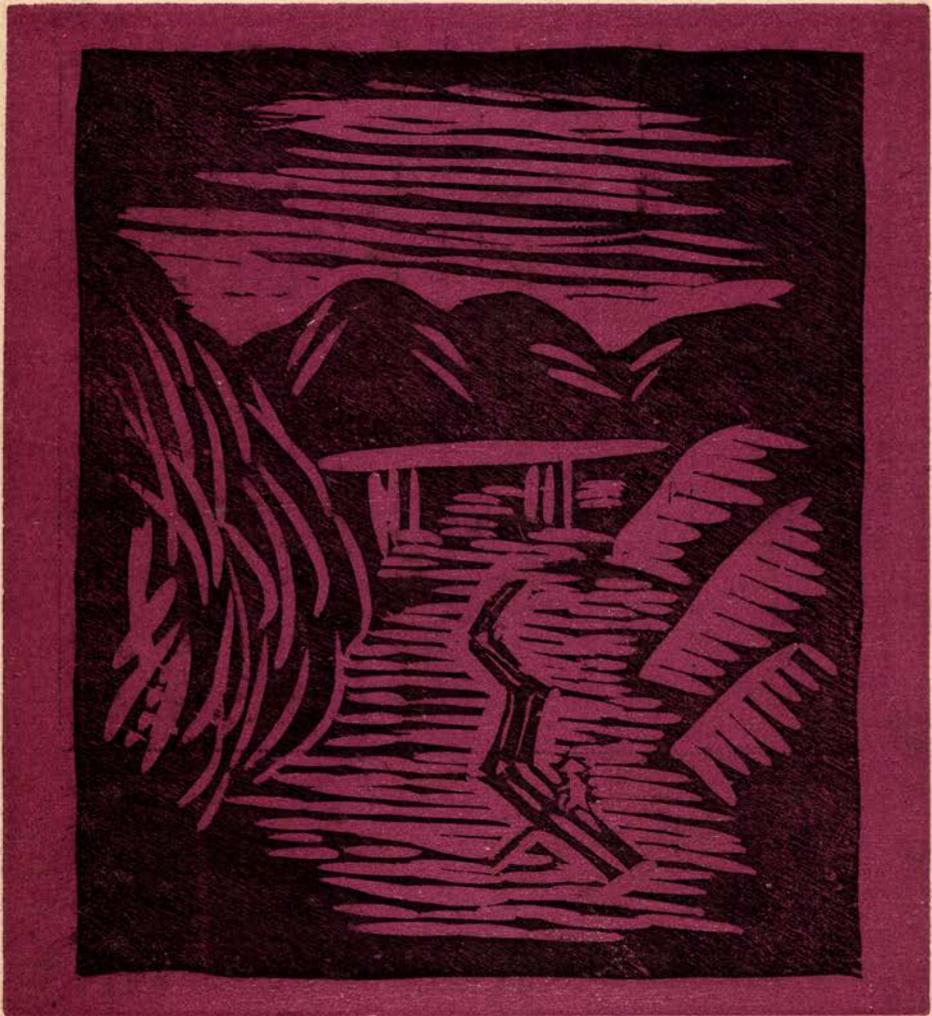


中華民國三十三年三月三日 定價每份三毫 每月一元 每季三元 每年十元 零售每份三毫

川柳雜誌

第一卷 第十號



川柳雜誌 第一卷 第十一號 (大正十三年十二月十五日發行) 目次

菘 菘 草 (近作) 麻生路郎 (一)

柳風 スポーツ 森 東 魚 (七)

在りし日の東京 駒井美の作 (七)

大正十三年を送る 麻生路郎 (六)

句 抄 (例會其他) (八)

第一支部句會 橋本二柳子記 (三)

第六支部句會 佐々木默闇報 (五)

近作柳樽 麻生路郎選 (七)

坂 (募集句) 相元紋太選 (三)

紅法師を悼む 橋本二柳子 (三)

川 柳 塔 (三)

美の作、輝翠、徹底郎、かほる、默闇、莢豆、雅幽
助六、史風、彩霞、柳路、豊乃女、二柳子

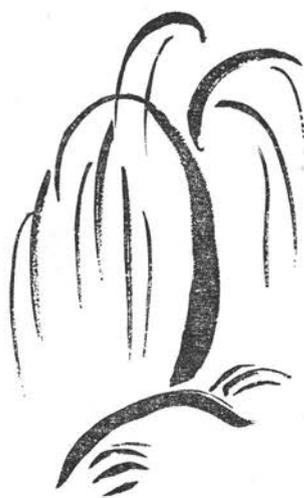
編輯後記 (三)



菠 稜 草

麻 生 路 郎

もういらぬやうに釣瓶は投げおろし
雑談の前にお布施がさらされる
稼がねばなきこ三十七八九
これだけを持つて歸れこ云はれて居
月末の金さへ渡しや出てあるき
久々を詫びて長唄師匠来る
座ざがあつてまゝさんらしくなり
君見たまへ菠稜草が伸びてゐる



川柳塔

⊕

駒井美の作

親方へ内緒で河豚の使者が立ち
下女の親五燭の灯る部屋で逢ひ
釣革にすがるこ娘見上げられ
長靴を脱けば騎兵の細い脛
小驛を前に佗しい魚店
智恵の無い顔を見渡す口入屋
腹ごなし跳しの旦那水を撒き

⊕

森田輝翠

大弓屋管函ミ云ふ地所を借り

諦めた通りになつて来て淋し
呼びつけた程に意見がないらしい
袖を振る舞妓は拗た姿なり
己が身の程を二男は考へず
指先で軽う摺んだ雪の傘
心持ち癒つただけの髪を梳き

バラソルは杖に仕上げたものでなし
宵寝する蚊帳打水の風を受け
見違へて瘦衰へた譯を訊き

㊦

太田徹底郎

此隅も網の鼠の齒がたゝす
言ひ譯をして居る側に子供が居
只顔の皮で笑つただけのこゝ
眞夜中ミいふに雀が啼いて居る
出迎へた子供しほれて壁へ立ち
猛然ミ出て悄然ミ歸つて來

㊦

高橋かほる

店先でちミ邪魔になる聞き合せ
旅人の後姿が景になり
旅人の目にゆつくりミした流れ
弟のハツキリしない紺がすり

陳列のきうくつさうな優勝族
箸紙の様の字だけは草書也

㊦

佐々木默閣

眼高低手やがて整理の數に入り
慇つか美男におはし不孝なり
平民それがしミばかり名をこめず
追々に隆盛ミミく支配人
ある場合獨身者のめぐまれる

㊦

黒木莢豆

ほがらかさ知らず廓に年が經ち
ちやんちやらおかしい時の短さ
なつかしい氣でひよつミ出た暮の犬
まう明日の鎌が研けてる暮の鐘
船長を流石ミミせる船の上
勢を見せて煙が町を抜け

落ちた葉が寄り添つてゐる藪の際
漬物を壓わて石もつめたさう
葉の落ちる音にも工面せかれてる
飛行機が蜻蛉の知らぬ自慢也
につこり三千供のお菓子貰ろて食ひ



關本雅幽

もう知つて居るのかみんな笑つて居
寢そべつて聞かれる母の意見なり
むつまじく餅屋ミすし屋並んでる
戀人の方へ愛犬振り向かず
言分は此方にあるが本家なり



松本助六

十周年店めかけた年もあり
親指が横になつてゐる新らの足袋
うぎん屋の休み夜逃げの様に見え

安産の母に襦袢が初手の用
二日目の宿の夜明けは知らぬなり
芝居から戻る三母のせき拂ひ
思惑があつて氣輕に動く事
降りもせず晴れもせずして旗日暮れ



原史風

身の上を聞かされる程宿に馴れ
着物着て脱いだが今日の仕事なり
風呂を抜く時ゾットする水の色
相談が眞味になつて風を知り
宵寝から起きて入つた阿彌陀籤
いつに無い箒へ女房笑ふなり
ぞつミする請求を見てゐる長火鉢
叱られてからは重たい箒なり
宵寝して意見をそれる積りなり



武田 彩霞

決算に夜徹し窓に灯がこもり
 柳屋もあるも艶めく籠行燈
 社會主義火のつきそいな頭なり
 助産婦の來るまで待たぬ神の恩
 古切手なきを長男集めてみ
 昇降機母親ぞつこして降りる
 逆らはぬ様に女給は山にする
 高利貸今日は長靴穿いて來る



岩崎 柳路

共鳴はしたがごちらも金がなし
 活字拾ひの様な邦文タイピスト
 復興の路傍にじやまな銀杏の木
 總方が感謝して居る至純さよ
 チトしやくな隣部屋から高笑ひ

退校をされレニンの著書を讀み



麻生 霞乃女

不景氣にかゝる人出を憤り

茶柱の立つのがせめてもの慰安



橋本 二柳子

編みものに娘の戀が知れるなり
 待ち人の笑顔に笑顔寄つて來る
 あつちあつち抱いた子のまゝになり
 酔ふて寢て居る事知らぬ廓の灯
 病み上り秋の田へ文持つて來る
 掃かせる處へ珍客入り來たる
 儲かつた事を話して金を借り
 教訓だ又友達が首になり
 失職に寢付かれもせぬ風が吹き



大正十三年を送る

路 郎 生

大正十三年の十二月が来た。世間の人達は年末といふきまりきつた忙しさに、おはただしい足取りを見せて往きかうてゐる。が私には未だ本當の十二月が迫つて来ない。ミ言つて落ちついてものを書くだけの健康が還つて来ないので半ば諦めたやうな心持ちで其の日その日を送つてゐる。

しかし、川柳を社會的に宣傳するこゝミ初心者を指導するこゝミ、川柳に對するいろいろの研究を發表するこゝミの使命をもつて生れた本誌の過去十一箇月をふりかへつて見るこゝミ必ずしも無意義な月日が流れたものこゝミは思へない。

これも多數の讀者の好意こゝミ、特別寄稿家の後援こゝミ同人の堅い結束こゝミが、兎にも角にも今日の川柳雜誌社の基礎をかたちづくつたのであるこゝミいふ事を思ふこゝミ感謝の外はない。

從來の柳誌が鬼董的にポツリくゝこ

發行されて来たのに反して、本誌は創刊以來一回の休刊もせず刊行して来たこゝミ、選句に於ても非常な厳選主義を斷行して来たこゝミ、本誌の投句家並びに同人の句が號を逐ふて、めきくゝミ向上したこゝミなきを思ふこゝミ嬉れしさに涙ぐましくなる。

川柳の革新運動といふこゝミも可成問題になつてゐるやうであるが私こゝミしては革新のための革新こゝミ言つたやうなこゝミはしたくないこゝミ思つてゐる。しかし一部の人達のやうに革新運動を異端視するやうな狭量さにはくみしたくないまして川柳を娛樂視したり、戲作的態度を採つて俗化せしめて行くやうな川柳家を見るこゝミ憚たらなく思ふ。例へその作品が過渡期的のものであつて多少の拙劣さがあらうこゝミ其の純真な態度には衷心から敬意を表してもよからうこ

思ふ。

が、しかし所謂革新川柳家をもつて任じてゐる人達にも革新川柳家を異端視する所謂既成川柳家も同様の狭量さが無いであらうか。自己の主張を急速に貫徹せうこゝミするこゝミころには必ずその人達の氣づかない狭量さが流れてゐるものであるこゝミを思はせられる。共に俱にもう少し考へられたいものである。

私は革新川柳家といふ言葉も既成川柳家といふ言葉も好まない。好まないだけではない餘り適切な言ひ表はし方ではないやうに思ふ。

川柳の内容を進化せしめるこゝミは川柳家の當然なすべきこゝミである。進化させる必要はないただ變化さへさせておれば、それでいゝこゝミ思ふてゐる人達は社會といふものをまるつきり知らない人達のいふべきこゝミであつて常に變化こゝミ進化が巧みに交錯するこゝミころにそのものゝ生命が躍動するのだこゝミ私は思つてゐる。

大正十三年を送るに際して、これだけこゝミは言つて置きたい。

柳風ス。ポーツ

◆ 森 東 魚

スタートは甲良に似せて穴を掘り
 太物の軸程なのをリレー持ち
 親友が出てスタートの穴を掘り
 チャンピング按摩の役を一人つれ
 吹流し程棒飛の鮮かさ
 飛鳥山圓盤投もしたまころ
 袈裟掛けのジャケツで居るがビツチ也
 左打手ビツチ、ライトへ合圖をし
 壘審は是れはお邪魔云ふ姿
 球審はキヤツチは龜を裏返し
 釣云ふ體でテニスは點を取り
 手拭を首にクルーは寫される
 砲丸へデブで通るが選に入り
 槍投に熊野育ちは面白し
 ラグビーは宿彌蹴速で入り亂れ

.....(大正二三、一一、二九).....

在りし日の東京

◆ 駒井美の作

吉原の裏はてんでな橋を持ち
 浅草に飲むで此兒の無つせば
 仲店は乳母の身錢を切る所
 田畑から乗れば筑波の朝霞
 高架から見た芝浦の差向ひ
 鮫ヶ橋へラヘラヘラ小火で焼ひ
 眼の保養したま出て來る駿河町
 瓢屋で逢へば碎けた閣下なり
 カフエテリア御手づからなる眼八分
 眼鏡迄かけて目白の賣残り
 平床で聞けば禿てる歌右衛門
 柳原店中うごく風が吹き
 魚河岸をぬけて女の邪魔がられ
 三崎町今日も二階は豚を喰ひ
 入谷から歸つて蚊帳が起される
 明石町御用羅馬字位讀み
 股倉に御臺場がある汐干狩

土産物持つて火種を取りに来る 凡平

松郎選

すき 焼

すき焼の戀しい風が吹きだした 莢豆
 すき焼に十六燭がくもるなり 凡平
 すき焼にまだ治らぬへきやう 銀燈
 すき焼きを温めて一把ほしい葱 助六
 すき焼で議論湯をさし水をさし 三巴
 すき焼へ母は喰ずに世話をする 百石
 すき焼でだうでも話まこめる氣 長人
 仲よしへ養ひた時分に報すなり かほる
 割下を入れて暫く煙草なり 東北
 すき 鍋へみな新しき學士號 馬行
 養へつまるこころで、焼眼が止み 輝翠
 すき焼に仲居の指輪よく光り 古城山
 水さしたすき焼の鍋見つめられ しける
 切込みで少し氣兼ね音を立て 高歩
 もうこれに限るよ肉つゝきつゝ 英光
 すき焼の襖を開けたまきの風 松郎

— 互選 —

看 病

看病の手で水薬こぼすなり 路郎
 看病の最後の人に母がなり 同
 看病をしてゐる方の顔の色 同
 看病を口にしてゐて遊んで居 同
 看病は末の妹のものさなり 同
 看病は逆らうまい腹できめ 同
 看病の目の腫はまだ初手のこご 同
 ドア一步内ミ外ミの附添婦 同
 寝た振りをして看病の逆らはす 松郎
 看病に來て佛壇へ尻を向け 同
 看病人こつそり咳を一つする 同
 看病を丁稚すまないな思ひ 凡平
 看病に乳飲み兒だけを連て行き 同
 隣室で看病人は喋りすぎ 同
 終電の笛を看病知つてゐる 馬行
 看病人駈を聞いてそつミ逃げ 同
 まあまるで子供ですわねミ看病 同
 耳打をされて看護婦一人増し 千代二
 母親の看病になり氣儘が出 同

バスケツト今日看護婦は歸る 同
 看病の初手は癒つたつもりにて 文久
 看病は襖の風に振り向いて 同
 看病が尋ねて見たい名刺なり 同
 水囊を仕かぬに下駄のまごろし 高歩
 指さしをするの芭蕉一つ裂き 同
 看病に心得のある花を差し 夢路
 看病を廊下へ呼んだのに氣付き 同
 看病も一つ水をたべるなり 古城山
 看病の耳に鳥の意地わるし 同
 看病の袷の袖が邪魔になり かほる
 看病はまたカステラかと思ひ 同
 看病の影が障子にうつつてる 刀三
 暮れかゝる部屋を看病閉めて立ち 同
 看病は一人で心細くなり 蚊十
 くだばつてしまへミ看病は言ひ 同
 病室に世帯の様な道具置き 山月
 看病は醫者の心を知つて居り 同
 看病の危険を冒す心懸け 百石
 たわごこの人へ看病耳を立て 同
 看病婦着物の裾を踏んで立ち 悟郎

看病婦 髪結ひ直す七度二分 同
 看病も寝さして貰ふ正午下り 助六
 お妾の看病お冷汲んだだけ 同
 看病の夫へ濟まぬ顔を上げ 十字路
 見舞客跡を宜ろしく頼まれる 同
 良い暮し子は看病の中に居す 潮風
 一寸した事に看病二人つき 秋葉
 本堂の時候看病外で知り 三巴
 兒の泣いた聲に看病をつま立ち 光太樓
 全快へ看病少しやせてゐる わたる
 看病は一人て窓の月を見る 二葉亭
 看病へ夕刊一つ投り込まれ 刀三
 味氣なく妻は看病するつもり 薫流
 看病も三時頃ださだけは知り 眠聲
 思ひ切り欠伸をしてる看病人 長人
 慣れたる看病心附け一つ 一路
 看病は子供を表の方へ出し 飯山
 夜のあけるこゝろ看病まぐみ 津々

五選

本社十月例会(十一日夜、於端の坊)當夜の出席者は路郎、松耶、寛、しげる、夢路、長人、文久、三巴、わたる、津々、千代二、眠聲、かほる

助六、凡平、百石、悟郎、十字路、潮風、二葉亭、一路、鹿歩、蚊十、薰流、刀三、馬行、光太樓、山月、英光、秋葉、柳骨、古城山、輝翠、東北、英豆、夢郎の諸氏私(二柳子記)

藁灰

藁灰の中から小石二ツ出る 駒人
 藁灰に限りまずよこ内儀呉れ 不知人
 火の付いたまゝに藁灰貰つて來 久雄
 藁灰へ又氣にかゝる水をかけ 花本
 藁灰の仕末は嫁が頼まれる 春三
 藁灰へ兄妹二人手をかざし 二葉亭
 藁灰に抱かれたいよな心です 莢豆
 藁灰に未だ草鞋の形があり 潮風
 藁灰へ御免々々三十能の手 悠々
 藁灰を鶏低う飛んで逃げ 秀哉
 藁灰を掃くに結立氣にかゝり 竹榮
 藁灰をするにも旦那口を入れ 眠聲
 藁灰を消しに掛るさあたり來 悟郎
 隣から藁灰もらうらら、かさ 波郎
 藁灰が此の夕立に廣くなり 廣賀
 藁灰へ粉炭を生けて眠くなり 雅幽

藁灰をたくに巡査のやかましし 凡平
 藁灰の跡は明日の朝にする 夢路
 藁灰さなつた處へ紙屑屋 松郎
 藁灰が河原の砂に掃き残り 久流美
 藁灰の中にまだく命あり 光太樓
 藁灰に面白さうな風が吹き 同
 藁灰も入れて今年をふりかへり 津々
 藁灰の出來たを朝寢聞かされる 同
 フンく云ふて藁灰して呉る 馬行
 藁灰は亭主の股の下で出來 同
 藁灰も出來て嬉しい灯がこもり 同
 藁灰の繩の結びがまだ煙り 助六
 藁灰を大切にする長火鉢 同
 藁灰もなつてトンドの話切ね 同
 藁灰のそばへ火鉢を持つて來る 同
 (佳)藁灰の暖かさなり親こ子し 同
 (佳)晚酌に今朝の藁灰だしめり 同
 (佳)藁灰になつて我家の方へ向き 松郎
 (人)藁灰の中で火種を見失ひ 柳
 (地)藁灰はつかむこ小くくなり 同
 (天)藁灰に酒は音なくこほれり 悠々

(軸) 薬灰に密柑の袋落ちてゐる 路郎
 (同) 薬灰をして夫婦あらたまり 同

—— 路郎選 ——

結 界

結界でそつし意真を出して見る 一醉
 結界をへだてて出前聞き直し 不越
 結界のさすが船場と思はせる 二葉亭
 傳票を散らし結果上て見る 山月
 結界へふこ顔見せた主人なり 竹榮
 結界に納まり後家を立通し 東北
 結界はまたいだ裾がひつかかり 春三
 結界の中で小判の封を切り 波郎
 結界はあぐら組むのに置たやう しける
 結界のミこまで値切る客が来る 刀三
 結界にお青樓の附が落ちてあり 放馬
 結界に此頃見ぬ高島田 雅幽
 結界を養子は拭て見たくなり かほろ
 結界にかけた袷天しかられる 双柳
 結界の中算盤と帳面と 莢豆
 い、御注文に結界立つて来る 松郎

結界へこのごろ嫁が出て坐わり 路郎
 結界をたゝみ本町夜さなり 凡平
 結界は東京行きの荷札書き 同
 紙幣束が結界越にちらさ見ぬ 夢六
 結界の通にキツイ風が吹き 同
 結界に昨夜以来の眠さなり 馬行
 轉寢をする結界に幕があき 同
 (佳) 結界へお叫頭をも仕舞ふ也 夢路
 (佳) 結界に並ぶ親子さ知れる顔 不知人
 (佳) 結界に朝つばらかけつまつ しける
 (佳) 結界へ無心の片手のせられ 不越
 (佳) 結界は門の埃へ注意する 長人
 (人) 使ひこみの日に結界の低い事 刀三
 (地) 結界の閑は根付鼻へ當て 松郎
 (天) 結界の中へうけこる子悶惱 路郎
 (軸) 結界のうちら錢箱だけの嵩 溪花坊
 —— 溪花坊選 ——

大 根

大根を引て大工を急すなり 同
 ひんぬいた大根の色ミ土の色 刀三
 配つてる様に大根を抜いてゐる 同
 冷な切つた手に大根を提いで来る 同
 大根も馬も夕陽の野を歸り 春三
 大根の花を見て来る 出養生 同
 橋桁にあたり大根川へ落ち 同
 大根屋最後に太いやつを出し 秀哉
 大根引力あまつて空を見る 同
 まないたへ大根の切れ音をさせ 同
 その驚き大根踏んだと思はれず 路郎
 大根をきざんで料理は名づけ 同
 郷里歸り大根吹いて喰べて居る 助六
 大根美味くなり正月近くなり 同
 まだ漬ぬ大根の葉のしほれ様 かほろ
 大根を切るまな板の古さなり 同
 大根を洗ふに川の端まで來 二柳子
 大根をきざむ庖丁寒うき 同
 別入れたあさは大根だけの村 溪花坊
 大根の虫大根の葉にうごき 同
 大根賣り西日の強い橋を去に 松郎

大根を漬て出入の多い家同
 八百屋程宿屋大根貫つておき山月
 提籠のふたが大根で盛上り同
 がたノミ云。大根おろし出夾馬行
 ぎの邊の大根が知ら驛に着き同
 一人寝る兒に大根をきざむ音悠々
 冬らしい大根洗ふ嫁の指同
 親一人子一人大根おろしにて長人
 引抜いて呉れた大根重すぎる同
 晝の菜社長も大根たべさゝれ二葉亭
 樂屋裏大根の様な足を見る同
 大根をい入るだけ買った新世帯柳骨
 大根の肌あかぎれの手で洗ひ莢豆
 大根の竿をまたけた束のまゝ夢路
 皺寄つたまゝで大根軒に住み不越
 大根を二〇加一本借りて來る一柳
 大根を食ふ迄知らぬ手ぎは見せ双柳
 大根屋路次へ二三把さけて來る凡平
 香具師の手で大根奇麗な花に夢六
 あの土の中で大根の白い色不知人
 名物の大根大根らしくなり津々

瓦斯

大根を一ぱい積んだ舟がつきしける
 大根を其まゝさける程になる潮風
 くだびやうに大根ずつてくる波郎
 大根をドシドシ食へご聞かされ放馬
 負てゐる大根一把提げて見る蚊十
 大根で熱かんミ云ふさへ來る一醉

井を通すミ瓦斯の音がする凡平
 あはて。女房へ瓦斯の出ぬ日なり同
 瓦斯引いてからが陰氣な家になり刀三
 薄暗いミころに瓦斯が燃て。同
 突然に瓦斯ボボくミ音を立て。長人
 窓明けたらしくマントル曇る。同
 瓦斯のお茶呑んで一番汽車に乗り同
 おそろいやうに夜更の瓦斯を。同
 漏れてゐる瓦斯を店から注意。同
 瓦斯器具屋チト間の抜けた鈴の音。同
 立話し瓦斯をゆるる。父しやべり同
 前後策電燈がつき瓦斯がつき同

— 互 選 —

臭いぞよ瓦斯じやない。炬燵。馬行
 瓦斯だけの灯が停電の町に見え。夢六
 瓦斯へ火をつけた音。寝間の中。波郎
 二階。瓦斯がもれてへんかいな。しける
 お隣の瓦斯が今日ももれてくる。蚊十
 瓦斯會社瓦斯はつかりの明りな。わたる
 香具師ミ瓦斯中に大輪をつく。一柳
 瓦斯の灯が消けさうになる夜店。春三
 瓦斯代へ旦那は一寸首を振り。眠聲
 瓦斯のあるこも桂庵云ひそへ。津々
 ミルクする夜中に瓦斯の事思ひ。山月
 青鬼の息づく様に瓦斯は燃。東北
 縁日のまがり角から瓦斯のかざ。一醉
 研究室晝書に瓦斯がミもつて居。秀哉
 取のけに瓦斯屋なかく。來。久雄
 瓦斯洩れを二階が下へ知らして。二葉亭

歌劇

歌劇ミか何んミか親爺いやになり。眠聲
 オペラ黨赤手クタイを。ノミ同
 歌劇ミ夢の國をばやつて居り。同

體操も少しまじつた歌劇なり
見物を忘れたやうに唄つて居
染られた様に踊つて出る歌劇
少女歌劇教科書にない唄ばかり
寶塚オペラ氣分の人通り
お父さんオペラでグツスリ寝てしま
歌劇から歸る我家の物足らず
オペラから覺めた眼で歸るなり
よるめいて歌劇は高い顔になり
悲しみを歌劇は胸へ手を當てる
歌劇たゞ美しかつた郷の母
合唱は揃つて足を動かせる
歌劇通聞かぬ年まで云ふて呉れ
あんな所へオペラ女優が歸る
同窓會歌劇の事で一寸もめ
巡業で一人減つたる歌劇團
有間越歌劇に一寸首を出し
年寄が只おてんばを見る歌劇
耳かくし歌劇で子供寝さしてる
寶塚歌劇嫌いなのも交り
歌劇團ぶつけた様な聲も出し

路郎 同 松郎 同 莢豆 雅幽 馬行 夢路 悠々 刀三 一醉 潮風 秀哉 凡平 助六 かほる 二葉亭

歌劇すき母に心配ばかりかけ
戀するに歌劇カツバツそうに
歌劇生女學生かご思ひきや
老役も黄色い聲で歌になり
歌劇にも一寸はなせる口をもち
肉體美歌劇はつきり見せてくれ
臺所で女中歌劇の節を眞似

蚊十 長人 竹榮 春三 津々 不越 夢六

あなたそら坊やが箸を持ちます
箸置いてさあきつちから掛る
割箸を割つて貰ふた國の母
面白く茶碗が沈み箸が浮き
いせいよく割つて小楊枝も落し
箸なしでさうして飯を喰べる
せいろそば一度に箸へ引つか
箸持つたま、道順を云ふてやり
御挨拶一座ピッタリ箸をおき
蒸し菓子へ揃けた箸の滑りさう
衛生に悪ふおまつせお箸箱

東北 馬行 悠々 波郎 津々 刀三 二葉亭 松郎 不知人 浪花坊 双柳

箸

— 互選 —

お辨當にお箸が見ゆる一年生
お茶碗の上へ御馳走様の箸しける
御主人ミ子稚も同じぞうに箸
燒豆腐箸へ力を入れまいぞ 長人

— 選互 —

十一月例會を八日の夕、例によつて端の坊
で開いた。出席者は、波郎、助六、莢豆、
長人、夢路、浪花坊、波郎、松郎、凡平、
双柳、柳骨、潮風、悠々、秀成、かほる、
わたる、放馬、一醉、東北、しげる、津々
山月、眠聲、竹榮、二葉亭、蚊十、雅幽、
刀三、馬行、黎明、冷笑、二柳子、の三十
名であつた。急に寒くなつたが相變らず句
作に熱心な人達が集つた。この夜からはじ
めて室を閉め切つたので作句に一層の緊張
振りを見せられた。新顔としては春三、不
越、夢六、一柳、不知人、久雄の諸君が出
席された。研究吟に句評を交換して十一時
半に散會した。(二柳子)

第一支部句會

十月廿五日の夕刻から、大阪市西區市電業
港託兒所樓上で支部句會を催しました。
席者は左の通りの盛會であつた。

松郎、馬行、刀三、一路、悠々、梅風、か
ほる、十字路、凡平、天海、竹榮、廣賢、助

六、わたる、泊水、山月、素人、しげる、
放馬・潮風、輝翠、二柳子（二柳子記）

兼題（猫） 松 郎 選

琴を弾く袖をチョイ〜猫はちや かほる
名を呼ばれ猫は春延を一つする 潮風
置炬燵猫のあくびを寒く見る 十字路
屋根の上寝しるる猫へ強い風 わたる
お隣の猫はあれからちんば引き 蚊十
鍋つゝく箸で隣の猫を追ひ 同
勦忍の緒が切れたよに猫が吹き 光太樓
晝寝から起きて妾は猫を抱き 凡平
晩酌の膝へ小猫がもぐりこみ 同
顔刺に妾は猫を連れて来る 同
吠られてゐる猫圓い脊を見せ 輝翠
又猫が行くので戸棚締に立ち 同
猫板にモデルの様に猫がいる 同
（佳）猫障子を開てソツト追ひ 放馬
（佳）晩酌へ隣の猫の小言なり 十字路
（佳）焚つける女房に猫は驚かし 助六
（佳）猫だけの椽に勿體ない日照り しける
（佳）猫の脊長うに延て晝になり 二柳子

（佳）猫の眼の〜廻る様に見ゆ 光太樓

（人）建築場きつかで猫が鳴いてる しける

（地）猫抱いて師匠の家に遠ざかり 悠々

（天）膝の猫頭出すたび叩かれる 馬行

（軸）猫抱いて人を馬鹿馬鹿に見る 松郎

席題（元結） 悠々 選

油手の母元結を買ひにやり 助六
元結を切つて三鉢渡される 廣賀
負力士元結迄も切れて居る 天海
元結を締めて頃合聞いてゐる 潮風
元結がゆるく妾のぐちさなり 凡平
元結へ梳子の力まだ足りず 輝翠
元結をキユーツミ締めた時の顔 十字路
元結へお師匠はんの力なり 同
元結も買はんならんぞ戎橋 松郎
元結を持たしても子は泣き止まず 同
（佳）元結の色も親御の氣にかゝる しける

席題（疊） 馬行 選

古疊敷くに大分智慧が要り 天海
又今日も机の下を掃き残し 同
年寄の願ひ疊で死ぬるこゝしける

あれしきの事に疊をけつて立ち 同

雑魚寝の一人疊で風を引き 凡平

すみつこで疊は一寸すぎがあき 同

閉會に少し疊はぬれて居り 竹榮

大掃除奥さん疊重たさう 同

付け貸の疊を妾汚なかり 十字路

古疊子供の多い事を云ひ 同

お茶の席疊を軽ふ〜摺り 輝翠

此疊こかいなあゝ大掃除 かほる

新しい疊へ子供遠慮せず わたる

鹽まいて取れ〜疊へ智慧を貸し 一路

疊摺れ〜にお辭儀をする女房 松郎

（軸）今日も疊の上で送る幸ち 馬行

（軸）女房さ疊の上で年を取り 同

席題（紙袋） 輝翠 選

すごろくの後ろに空の紙袋が かほる
半斤云ふに大きな紙袋 同
雑穀屋に捨てるものが袋 松郎
かくすには便利の悪い紙袋 廣賀
紙袋長男の手を叱りつけ 悠々
紙袋に大師講さ書いてあり 潮風

何買うて来たか亭主の紙袋
(軸)紙袋丸めて捨てる妻楊子
十字路
郎翠

席題 (放火) 互選

燒死さすまで放火犯思つてず
妬してうらんだ揚句の放火
同
こんなに燒けるこは知ぬ放火
二柳子
火つけするには惜しい藏の色
かほる
放火した譯に女は泣く斗り
悠々
放火して餘りの騒ぎ怖く見る
放馬
放火犯三つ半鐘を強くきく
しける
火の手見て自首を氣になつた
廣賀
電車からおのが附け火を振返り
馬行
放火したのも烏打をちこ汚し
刀三
放火狂ただ面白かつた事を云ひ
凡平
放火犯續にさわたつたから言ひ
わたる
續く火事又も放火であつたりし
竹榮

第六支部句會

十二月二日午後一時より六甲苦樂園松風亭
に於て開く出席者は
路郎先生、松郎、刀三、二柳子、一洲、馬
行、しげる、蚊十、凡平、一笑、山月、眠

聲、冷笑、黎明、蝶夢樓、潮風、松風、歌
闇、英豆

象題 (別莊) 松郎選

別莊を見くらべて往く人通り
袋中
別莊に薬屋根一つ目立つなり
山月
別莊の構へ、社の様に建て
同
別莊へ今日初めての小間使
一笑
別莊が出来る時分は癌になり
黙闇
殿様の顔も知らずに別莊番
葵豆
別莊の門にはつきり日が暮る
同
夏中はあららの家へまひります
同
旦那まだ此處の別莊に馴れてず
刀三
別莊の所聞いてる勧誘員
同
叮嚀におじぎして行別莊地
しげる
別莊番只はいくこ云ふばかり
同
別莊へ魚屋これつだけになり
同
戸締りもかたく別莊夜こなり
同
窓あけたま、別莊に晝になり
秀哉
別莊も飽いて別府で宿を取り
眠聲
別莊でいつも夕方頃歌ひ
蚊十
別莊へ大隊本部をかねたり
悠々

別莊が一軒建つて廣い道
松雨
その歌集別莊で出来た歌ばかり
路郎

住

別莊へかけた電話が氣にかゝり
東郷
別莊の朝へ主治醫も父が着き
悠々
別莊へ來給へアハ、裏長屋
松雨
すぐ其處に見へて別莊廻り道
一笑
昇給もせず別莊を見せしてくれ
馬行
別莊の方でおわるい事を聞き
同
任んでるぬ様に別莊任んでる
同
別莊の癖に反感持つてゐる
路郎
感激もなく別莊に生きてゐる
同
末の子の名で別莊を建てしやり
同
貸別莊奴は儲けたなと思ひ
同
別莊へ來ても女中の國なり(人)
眠聲
別莊へきて父親へ腹を立て(地)
蚊十
別莊で決算表を軽くみる(天)
刀三
別莊に大根が養(軸)芋が養(軸)
松郎

席題 (病身) 路郎選

菊咲けば體いたはる氣にもなり
葵豆
あきらめこいふを病身あたへ
同

丸の込む如に病身呼び込まれ 一洲
 病身の外に氣質を案じさせ 松郎
 病身の一寸書いては直ぐ破り 同
 病身の夫勵ます膳が出来 馬行
 病身の癖に試験を受けたがり 同
 弱い兒の事で今夜も醫者に逢ひ 同
 漏つほい部屋に病身坐つてゐる 刀三
 母親は病身のためか娘を見 蝶夢樓
 病身であつて親への恩を知り 冷笑
 病身に生れ別荘もいやなごこ 眠聲
 置で會ふ醫者に模倣を尋ねられ 山月
 病身へ夜具がおもたい冬になり 凡平
 病身の姉になつた近所の子 しける
 病身へ繼母の仕打變るなり 同
 度々の事で御醫者も笑ひ出し 潮風
 濱づたひ病身さいふ歩き振り 同

席題 (朝寢)

馬行選

病身へまさかの金も持たしこき 路郎
親のいふまゝに轉地の荷ごしへ 同

番頭が坐る朝寢の枕元 同
 その電話朝寢の部屋へ取次がせ 同
 うう云へ誰れ來てゐたなも朝寢 松郎
 受付へ朝寢してゐたさは云はず 同
 もう五分間朝寢は目をむり 刀三
 朝寢坊出せばなしに顔そむけ 蝶夢樓
 朝寢から醒た拍子に午砲がなり 黙閣
 學校へ母は朝寢の子を送り 黎明
 原稿料吹つけかきいて朝寢なり 馬行
 席題 (乗合) 互選

乗合へ先に乗つたが令夫人 路郎
 國を出て今乗合の運轉手 同
 乗合で夫の噂小さく聞き 同
 乗合つて見たたい女に件が来る 黙閣
 乗合つた當座は皆んな君子なり 同
 乗合ふて子供を守もしてみたり 蝶夢樓
 乗合の窓で吃驚して斗り 馬行
 錦を飾るに乗合揺れすぎると 同
 乗合の揺れた拍子に腰を掛け 同
 乗合の娘たもこを持てあまし 凡平

乗合の外は一入降つて居り 同
 暮れて行く村へ乗合馬車戻り 同
 見覺の顔に乗合狭くなり 一洲
 乗合の響ミ砧打つ響き 松郎
 乗合に伴れられた子は父の膝 同
 乗合へば元の下男が席を開け 一笑
 子を連れて乗合馬車をせまく 同
 乗合になつたも縁三老婆云ひ しける
 乗合を降りる三瀧の音かする 同
 乗合で煙草一本喫ふただけ 刀三
 乗合が手入もせずに出てしまひ 同
 渡し舟半は苦の外で濡れ 潮風
 道問へば乗合馬車も教はられ 同
 乗合を除けてゐるのに泥をかけ 山月
 釣り船で知つた船頭へ乗合せ 同
 乗合の娘へ何か尋ねてる 蚊十

こん度家庭の都合で左記へ引越しました。ちみお遊びに
 岸和田市下野町四一九
 川柳雜誌社第三支部
 太田一聲

募集句

坂 楳元紋太選

ちこ酔よて右みぎころ坂さかのはかきらす 百石
きらり坂さか上あつて祖師そしの恩おんを言いひ 俊翠
機關車きかんしゃが二臺ふただいこ氣付きつけく上ありなり 山月
鐵道てつどうが敷ふけて淋しみしい坂さかこなり 眠聲
坂さかへ來きて自轉車じてんしゃの荷おが重おも過ぎる 嶺月
坂さかの茶屋ちや素通すとお出來きす一寸いちゆん寄り 香氣坊
坂さかの名なに因よんだ坂さかの停と留りゅう場ば 二三吉
ゆとりく坂さか下くだり切きつて街まちへ出でる 村夫
空車くわ只ただ裕ゆ々々坂さかを下くだり 清戀子
あのへんがそつだ坂さかを下くだる 竹榮
三輪車さんりんしゃ坂さかを押おし振ふり返かへり 一兵
まん中なかに交番こうばんがある長ながい坂さか 白柳子
様々さまざまの姿すがたで登のぼるひきい坂さか 吐露坊
終しまひかこ思おもへば復またも坂さかになり 龍草
差さかゝる坂さかを見み上あげて尻しつからけ 不越
近道きんどうこ言いふので上あるきつ 元山

勾かぎ配ばいが急きうミレルの音ねで知しれ 乾坤
負おん笈おんにちこ無理むりな坂さか無理むりな坂さか 夜調
坂道さかみちを困こりきつてる 仲なつ仕しなり 失名
手拭てふきを脚あしへて坂さかにさしかり 鷹步
是これからはもう樂らくですミ峠茶屋みづたけちや 一柳
結局けつぎゆは登のぼつたッけの坂さかを下くだり 同
坂道さかみちを下くだりて引ひ越こ荷おがゆるみ 秀哉
下くだり坂さかだよ後ご押し聞きかされる 同
此この奥おくにまだ坂道さかみちのある借家かきや 一洲
峠みづたけ越こす一人ひとり一人ひとりがこちら向き 同
二ツ目坂ふたつめさかで荷馬うまはすねてる 廣賀
庭石にわいしを坂さかから二頭ふたご曳ひにする 同
ガソリンガソリンの音おと喧わしく坂さかを行いき 輝翠
下くだり坂さか襟えり足あし惜お氣きなく見みせて 同
石垣いしがきの高たかさを坂さかへ見みせるよう 雅幽
ゑらかつた坂見さかみ下くだり居ゐるラム子 同
横顔よこがほへ西日にしひを受け坂さかを降り 松郎
坂さか一つ寺てら寺てらこにはさまれ 同
下くだり坂さか下くだりキ掛かけてゐる 同
名なばかりの坂さかを上あれば文化村ぶんわむら 同
こんな坂位さかゝらミ自轉車玉じてんしゃたまの汗あせ 二葉亭

後押あごおしが這はふ様ようにして登のぼるなり 同
靴くつずれがほつ／＼痛いたむ下くだり坂さか 凡平
登のぼり坂さかリツクサツクが重おもたさう 同
海うみが見みわて一息いっせき入いれる登のぼり坂さか 同
人力車じんりきやうなづくやうに坂さかを挽ひき 同
變かな音おと立て、自動車坂じどうしゃさかを降り 同
押方おしあたがだるい坂さかでぐちになり 同
七曲ななまがひが、今いま來きた道みちを振ふり返かへり 同
坂さか一つ降くだりて小字こざの名なが違ちがひ 同
車夫くるまぶの汗あせ坂さかだけ降くだりよかと思おもひ 月の輪
車くるま上うへでもホツトする程ほどの坂さか 同
わらい坂さか上うへで幹事かんじが笛ふえを吹ふき 山美
自轉車じてんしゃの連つれが御免ごめん坂さかを降くだり 同
長ながい坂さか登のぼるミ寺てらのあるばかり 同
ホロ酔よも正氣せいぎで下くだるきつ 同
マラソンの一人ひとりが坂さかへ來きて倒たおれ 喜花
帯おビに裾すそはさんで女坂おんなさかを越こえ 同
口笛くちふえで散歩さんぽは坂さかを下くだりて來きる 同
坂さかになる船室せんしつに酔よふた話わなり 同
あちから行いけばよか、坂さかで、 同
自動車じどうしゃのうなり續つけて坂さかを行いき 同

坂なれば休めさばかり銀杏の樹 三巴
 一日一善坂道で見逃さず 同
 空想の先を折られて坂を降り 同
 すぐそこ言っても坂を二つ越し 琴月
 下り坂牛があまりにおそすぎる 同
 先頭の登つた坂がうらめしい 同
 もう二ツ 坂の有る事一人知り 助六
 女連れ坂によつほぎ遅れて來 同
 別荘の裏門出るに急な坂 同
 強行軍益々急な坂になり 十字路
 不動坂講元丈は馴れたもの 同
 あの坂で痛めたなご靴を脱ぎ 同
 阪道を登るも牛の力なり 同
 これし坂に矢つ張り息が切れ 東城子
 坂道へ来て先生は立ち止まり 同
 この坂でいつも見受ける乞食 同
 坂道で車力同士の仲が良し 同
 梶を持つ身に厄介な坂が見 馬行
 五月雨が坂をきれいに洗ひ去り 同
 案の定坂の途中で横になり 同
 五六人坂の途中で頼まれる 同

急な坂金剛力を馬子も出し 美の作
 行倒れ坂はようよう來たらしい 同
 滑り臺小さな坂を嬉しがり 同
 辻俵坂を上つて息を切り 同
 佳 吟

いつも來て坂の長さに馴れて。 一三舌
 よし來たミ坂で車を押してやり 琴月
 堂守は朝晩急な坂に慣れ 美の作

紅法師を悼む

橋本二柳子

金澤の川柳家小林紅法師君が十一月の十日に亡くなつたさうである。私がかはじめて君を知つたのは五月十六日の夜であつた。本社の六厘坊忌が例の端の坊で開かれた晩で、氏が同縣人だぞ知つて一層なつかしく思ひ、散會後數名の同人と共に同氏もブラ〜道頓堀の夜を柳談に耽りながら歩いた。南海食堂へ落ちついてからも話はずきなかつた。その夜は鳴尾

の遅日莊へ泊られたさうであるがこの時が、私ミ君ミの初對面で、第二回目に逢つたのはこの夏、路郎先生と一緒に北陸の旅に出た時、八月一日の夕、私達のために「遊月」で歓迎句會を「尾山食堂」で歓迎宴を開く幹事の一人にして大いに骨を折つてくれた時である。しかしその時はもう餘程病勢も進んでゐたらしいので厄介をかけるのを氣の毒に思つた位であつた。君の衷心からの好意は充分にうけることが出來たので今思ふても感謝の念が湧かない譯には行かない。

八月一日夜遅く尾山食堂で別れたのが君ミの永遠の別れミなるさは思はなかつた。まだ春秋に富む君であるのに、あまりに儂ない人生ではある。君の靈に左の一句を捧げて瞑福を祈る。

骨折つた人早死さ思ふなり 二柳子





編 輯 後 記

▲いよ／＼十二月號となりました。これ
で月刊を斷行した譯です。私達のやうに
別に本職をもつてゐるものにまつては月
刊斷行は仲々容易では無いのであります
その容易でない事を一つ斷行したさいふ
だいで本年のころはお目こほしを願つ
て置きます。

▲十二月號は残つてゐる句稿を出来る限
り發表したいと思ひ、御覽の通り殆んご
句ばかりの號にいたしました。それから
頁數も本號に限つて少しく減少いたしま
した。これは新春記念號の増頁へ更に増
頁して埋合せをこころいたしました。
▲本誌創立に際し大變骨を折つて呉れた

吉川啞人氏が家事の都合上今回本社同人
を辭されることになりました。

▲第二支部は森田輝翠氏の都合で、原史
風氏に面倒を見て貰ふことになりました
▲原史風氏が北海道方面旅行中各地の柳
友諸氏に大變御厄介になつたさうであり
ますが、一々御挨拶狀は差上ませぬが御好
意の程は私からも厚く謝します。

▲高見柳骨氏が今度廣島の電信隊に入營
するこゝになりましたので十二月四日に
築港で第三支部主催の下に入營送別會
を催しました。(句報は追つて發表)

▲太田一聲氏は多忙の中を多く岩國から
宮島方面を旅行されたが、同方面の柳友
氏にはお目にかゝる機會がなかつたさうだ
▲西原柳雨氏から特に寄稿された川柳略
語解の遺補は、次號に譲ることになりま
したから不惡願ひます。

▲岸本水府氏の選「掛取」は選稿未着に
つき投句家諸子の御了承を願ひます。

▲廣島の安井八翠坊氏が最近來阪された
さうであります、小生が病氣のため

お目にかゝるこゝが出来なかつたのは大
變遺憾でした。

▲外骨氏主筆の變態知識は十二月號限り
で完結になりました。

▲塚崎松郎氏は大阪市北區佐藤町一八番
地へ移轉。

▲白石維想樓氏は東京市外巢鴨町上駒込
七六九番地へ移轉。

▲窪田而笑子氏は東京府下野塚町字源兵
衛二二五番地へ移轉。

▲金澤の小林紅法師氏は十一月十六日に
長逝されました。悼ましい限りです。

▲近作柳樽で奮つてゐた野村三吉氏も
十一月に亡くなりました。

▲左和右平氏は目下大阪東區道修町四丁
目高安病院に入院してゐられます。全快
を祈る。

▲私の病氣は少しくいゝ方ですが、まだ
全快といふころまで漕ぎつけられませ

ん。本號もそんな具合で莢豆三二柳子
私こで編輯をいたしました。

▲前號正誤表も出したが紙面の都合で
春に譲ります(路郎生)

讀 書 子 告 告

- ▼大阪一流の古本屋です。どんな本でもあります。
- ▼商賣にかけては掛引がありませんから安心です。
- ▼主人公藤堂氏は本の蟲の心持をよく知つた人です。
- ▼だからいろんな話をしながら愉快に本が見られます。
- ▲道頓堀邊へ御出かけのせつは是非立寄つてあげてください。(路 耶 生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

投稿規定

▼句稿は別紙に

認め、住所氏

名を明記する

こと。

▼書體はなるべ

く楷書「川柳

雜誌原稿」を

封筒に朱記す

ること。

▼締切は厳守さ

れたし。

▼各地會報は清

記のこと。

▼用紙は半紙又

は同型の對紙

に限る。

▼投稿其他につ

き御問合せは

べて返信料封

入のこと。

募 集

第二卷第二號課題

十二月二十五日締切
(各題二十句以内)

▼試 合

▼除 隊

▼竿 竹

井上劍花坊選

龜井花童子選

橋本二柳子選
森田輝翠共選

第二卷三號課題

一月二十五日締切
(各題二十句以内)

▼花 道

▼旅 費

▼子 守

篠原春雨選

柳川洲馬選

關本雅幽共選
岩崎柳路共選

每 號 募 集

▼近作柳樽(句數無制限) 麻生路郎選

▼各地柳壇(會報) 編輯局選

▼文章(評論研究吟行漫文)

價 定

| | |
|-----|-----------|
| 一 部 | 參 拾 錢 |
| 六 部 | 壹 圓 六 拾 錢 |
| 十二部 | 參 圓 (共稅郵) |

料 告 廣

| | |
|------|---------|
| 特等一頁 | 拾 拾 圓 |
| 普通一頁 | 拾 拾 圓 |
| 同半頁 | 拾 拾 圓 |
| 五號一行 | 壹 貳 參 圓 |

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みにするのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十三年十二月十日印刷
大正十三年十二月十五日發行
第一卷 第十一號
(毎月一回十五日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 二 郎
大阪市東區農人町二丁目七番地
發行所 藤 本 兄 弟 社
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番

賣 店 書 攤 賣
(大阪) 明文堂 百足屋 公立社 柳 屋
(東京) 東 條 (京都) 三 宅 (神戸) 米 田
(金澤) 石 井 (松任) 三 須 (願館) 石 塚

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹 麻生路郎

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|------|
| 岩崎柳路 | 原史風 | 橋本二柳子 | 西垣松雨 | 龜井花童子 | 太田一聲 | 太田徹底郎 | 高橋かほる | 高橋古城山 | 高見柳骨 | 竹田蘆穂 | 武田彩霞 | 竹内多聞 | 宗清夜調 | 黒木莢豆 | 柳川洲馬 | 松本助六 | 駒井美の作 | 麻生葎乃 | 佐々木黙閣 | 宮内一洲 | 森田輝翠 | 關本雅幽 |
|------|-----|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|------|

第一支部

大阪市西區八條河南小路

幹事 橋本 二柳子

第二支部

大阪市北區南同心町二丁目四五〇

幹事 原 史風

第三支部

岸和田市下野町四一九

幹事 太田 一聲

第四支部

大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方

幹事 關本 雅幽

第五支部

大阪市東區御堂町二二一番地

幹事 駒井 美の作

第六支部

兵庫縣武庫郡六甲菩薩園

幹事 佐々木 黙閣

第七支部

大阪市外南濱一八二

幹事 西垣 松雨

第八支部

神戸市旭通二丁目八三

幹事 宮内 一洲

第九支部

山口縣山口町石原小路

幹事 柳川 洲馬

第十支部

神戸市中山手通二丁目九五

幹事 武田 彩霞

第十一支部

東京芝區愛宕町一ノ六大成社内

幹事 岩崎 柳路

第十二支部

函館市青柳町五〇

幹事 龜井 花童子

第十三支部

大阪市外平野郷梅ヶ枝町五丁目

幹事 松本 助六

定價 三拾錢

大正十三年三月三日第三號（郵便物認可）（毎月一十五日發行）
大正十三年十二月十日停刊 大正十三年十二月十五日發行